生徒の古典への関心を高める授業展開
－単元の工夫と生徒の情報処理のスタイルに着目して－

学籍番号　229117
氏　名　西内　春美
主指導教員　田中　俊弥
副指導教員　田中　滿公子

１．課題と目的

「高校生の国語に対する苦手意識に関する調査研究」(野田・若杉・林, 2014)のアンケート結果では、古典への苦手意識を持つ高校生は、約７割から８割で、多くの生徒が「文法の理解」を苦手としている。実習校も同様に、受験に関係しなければ、古典に興味を示さない生徒が見受けられる。そこで古典の作品を通して、共感できることを学び、自ら考える力を養い、伝統的な言語文化の理解に繋げたいと考えた。生徒の苦手意識を軽減し、古典への関心を高めるためにはどのように授業を展開すればよいのか。本実践研究では、古典(古文・漢文)の世界に触れる楽しさを生徒に伝えることによって、古典への抵抗感を軽減し、意欲的に学ぼうとする授業の展開方法を検討することとした。

２.実践研究の内容

【基本学校実習Ⅰ-１】　報告者の古典の指導方法の見直し⑴

令和４年４月、報告者の古典(古文・漢文)の授業が適切であるかを見直し、古典学習に関する教務手帳の記録や評価をもとに、効果的と思われる指導方法を抽出した。それは、①古文の予習ノートに、本文、品詞分解、現代語訳を記させ、継続して報告者が添削する、②古典文法の基礎知識を「百人一首」を用いて学習させ、歌の暗誦と小テスト、間違い直しの反復学習をするものであるが、結果として、差となる要因は見いだせなかった。

【基本学校実習Ⅰ-２】　報告者の古典の指導方法の見直し⑵

令和４年５月から令和４年７月、第２学年２クラスに、百人一首を通して作品の背景や場面を大まかに把握させた。教材は『十訓抄』「大江山」、『沙石集』「兼盛と忠見」で、印象的な場面を、ワークシートに絵で表現させ、登場人物の言動を捉えて理解に繋げることで、古典説話の世界に少しは近づけたのでないかという印象を受けた。

【基本学校実習Ⅱ-１】生徒の情報処理のスタイルに着目した授業展開(同時処理型)

令和４年８月から令和５年１月、作品の内容を大まかに把握した後に、文法に着目する同時処理型の授業展開を検討した。第２学年２クラスに、映像や絵を通して作品のイメージや概要を把握させた後に、詳しく学習した。古文教材は『伊勢物語』「通ひ路の関守」、『更級日記』「東路の道の果て」、『源氏物語』「桐壺」光源氏の誕生・藤壺の入内・若紫、漢文教材は『史記』「鴻門之会」、『白氏文集』「長恨歌」で、生徒のコメントカードをもとに、スライドで形容詞や形容動詞に着目させて心情を捉え、文法を押さえて内容の理解に導けたかと思われる。

【基本学校実習Ⅱ-２】生徒の情報処理のスタイルに着目した授業展開（継次処理型）

令和５年１月から３月、第２学年２クラスに、順序に従って全体に広げる継次処理型の授業として、人物系図で登場人物の関係を理解させ、敬語に着目した授業展開を検討した。教材は『大鏡』「南院の競射」、『枕草子』「大納言殿参り給ひて」で、敬語が多用された作品では、人物系図を理解して出来事を順に捉えて読むことが、効果的ではないかとの感触を得た。

【発展課題実習Ⅰ】単元の工夫と生徒の情報処理のスタイルに着目した授業展開①

令和５年４月から７月、第３学年「古典Ｂ」必修２６人に、単元目標に従い、同時処理型や継次処理型の授業展開を検討した。教材は漢文『世説新語』「三横」、『本事詩』「人面桃花」、『聊斎志異』「酒虫」、古文教材『蜻蛉日記』「父の離京」「うつろひたる菊」「鷹」、『枕草子』「宮に初めて参りたる頃」である。「酒虫」は同時処理型で絵から内容を想像させ、他は継次処理型で、系図等を用いて登場人物を捉え、行動と心理を軸に人物像をイメージさせた。板書を工夫して内容の展開に従って作品の主題を考えさせた。授業後のアンケートでは７割以上の生徒が「わかった」「よくわかった」と回答し、「三横」、「人面桃花」、「酒虫」、『蜻蛉日記』「うつろひたる菊」等は、興味や関心をもった作品として答えた生徒の率が高かった。

【発展課題実習Ⅱ】単元の工夫と生徒の情報処理のスタイルに着目した授業展開②

令和５年８月から１１月、第３学年「古典Ｂ」必修２６人に、単元目標に従い、作品に応じて同時処理型や継次処理型を融合させた授業展開を検討した。漢文教材は、『史記』「廉頗・藺相如」（「璧を趙に帰さしむ」「刎頸の交はり」）、「荊軻」（「風蕭蕭として易水寒し」「図窮まりて匕首見る」）、「漢詩」李白（「子夜呉歌」「山中対酌」）、杜甫「兵車行」、古文教材は『紫式部日記』「水鳥の足」「同僚女房評」、『源氏物語』「須磨」である。

『史記』は、最初に絵を用いて場面を想像させる同時処理型、後に内容の順に従って継次処理型の授業を展開して、グループワークと発表や調べ学習をおこなった。アンケート結果から、「自分で調べること」や「交流すること」で、意見交換ができ、授業が活性化されて、生徒の古典への関心を高める授業に繋がったのではないかと推察する。

３.総合考察

授業アンケートやインタビュー結果から、学習のサポートが必要な生徒は、先に絵を用いて作品の概要を捉えるとわかりやすいと述べていた。特に漢文は、絵から想像して全体を捉える同時処理型の授業展開は、抵抗感が軽減されて概ね有効であったと考えられる。一方、主体的な学習習慣が身についている生徒からは、自分の力で文章の読解に取り組み、理解した内容が正しかったかどうかを、後で確認したいという意見があった。絵を見てヒントを与えられるよりも、自ら考えて、進んだ学習にも積極的に取り組みたいと望んでいた。また、生徒は「わかる授業」を求めていて、単元目標を明確にして本文の展開に従って、人物の行動や心情を順にスライドで整理する継次処理型の授業も、その要望に応えられるものであろう。印象に残った作品は、男女や親子の愛、不思議な話を扱ったもので、話の内容が面白いものに興味をもっていた。日本史の授業と関連付けて歴史物語を読むことの面白さを感じたという意見もあった。

本実践研究では、単元目標に従って、同時処理型・継次処理型の授業展開を検討したが、今後も、古典への関心を高められる授業の改善に取り組んでいきたいと考えている。